明治国際医療大学誌　12 号：37-48，2015
© 明治国際医療大学

演 題 一 覧

医学教育研究センター

・iPS 細胞における腱細胞分化誘導の検討
　　鳴瀬 善久，安芸 洸平，廣瀬 英司，都築 英明，松浦 忠夫
　　自然科学ユニット

・ビーシュリンプの紋様形成（色素細胞）に関する研究
　　堺澤 辰弥，廣瀬 英司，都築 英明，松浦 忠夫，鳴瀬 善久
　　自然科学ユニット（鍼灸学部 1 年生）

・三叉神経節における in vivo 細胞内電位記録法を用いた単一ニューロンの機能形態
　　外村 宗達，榎原 智美，黒田 大地，熊本 賢三
　　解剖学ユニット（大学院博士 2 年生）

・ラット手掌肉球に分布する感覚神経終末の形態
　　大槻 妙子，黒田 大地，榎原 智美，熊本 賢三
　　解剖学ユニット（大学院修士 2 年生）

・小分子量 G タンパク質 Ran システムに関連する遺伝子の配列解析
　—新規抑制遺伝子が mTOR システムに関わる可能性の検討—
　　廣瀬 英司，二又 亮，鳴瀬 善久
　　解剖学ユニット

・胸腺皮質上皮細胞における LTβR シグナルの役割
　　糸井 マナミ，千葉 章太
　　免疫・微生物学ユニット

・Foxn1 により調節される胸腺上皮細胞の分化及び機能に重要な分子の解析
　　千葉 章太，糸井 マナミ
　　免疫・微生物学ユニット

・心拍動による肝臓の拡散強調画像の信号変化の観察
　　梅田 雅宏，渡邉 康晴，村瀬 智一，樋口 敏宏
　　医療情報学ユニット

・MR を用いた筋スクリーニング法の確立
　　渡邉 康晴，木村 啓作，梅田 雅宏，村瀬 智一，樋口 敏宏
　　医療情報学ユニット

・仮想灸刺激に伴う脳活動変化の検討
　　村瀬 智一，樋口 敏宏，梅田 雅宏，渡邉 康晴
　　脳神経外科学ユニット（博士研究員）

鍼灸学部

・腰痛に対する鍼治療と局所注射の比較—ランダム化比較試験—
　　井上 基浩，中島 美和
　　臨床鍼灸学講座

・腕神経叢への電気刺激が正中神経血流に与える影響
　　中島 美和，井上 基浩
　　臨床鍼灸学講座

・変形性膝関節症による膝関節可動域制限を呈する症例に対する鍼治療の効果
　山口 成広，井上 基浩，中島 美和
　臨床鍼灸学講座（大学院修士２年生）
・トリガーポイント検索方法に関する検証―効果的な鍼治療を行うために―
　小田切 耕平，井上 基浩，中島 美和
　臨床鍼灸学講座（大学院修士１年生）
・月経随伴症状に対する仙骨部への円皮鍼の貼付による効果
　金 令子，井上 基浩，中島 美和
　臨床鍼灸学講座（研修生）
・アトピー性皮膚炎に対する鍼灸治療
　江川 雅人，福田 晋平，苗村 建慈
　保健・老年鍼灸学講座
・鍼治療によって生じる視力向上効果
　鶴 浩幸，皇甫 泰明，福田 晋平，江川 雅人，北小路 博司，片山 憲史
　保健・老年鍼灸学講座
・駆血圧の違いがヒト安静時における体表の硬さに及ぼす影響
　木村 啓作，渡邉 康晴，吉田 行宏，城田 健吾，片山 憲史
　保健・老年鍼灸学講座
・運動負荷時のエネルギー代謝に及ぼす鍼通電刺激の影響
　吉田 行宏，林 知也，木村 啓作，片山 憲史
　保健・老年鍼灸学講座
・高齢者疾患に対する鍼灸治療：パーキンソン病に対する鍼灸治療
　福田 晋平，江川 雅人
　保健・老年鍼灸学講座（博士研究員）

保健医療学部
・長距離ランナーに対するアイシングに関する研究
　―レース直後のアイシングに対するアンケート調査―
　池内 隆治，川村 茂，中川 達雄，丸山 顕嘉，大木 琢也，泉 晶子，神内 伸晃
　基礎柔道整復学講座
・運動時における運動単位活動電位の形状変化に着目した同定法
　赤澤 淳，岡本 武昌
　基礎柔道整復学講座
・肩関節前方脱臼整復モデルの開発
　神内 伸晃，上見 美智子，泉 晶子，大木 琢也，行田 直人，岡本 武昌
　臨床柔道整復学講座
・股関節マイクロ牽引法が脊柱可動域に及ぼす影響
　中川 達雄，中川 貴雄
　臨床柔道整復学講座
・運動のセット間における頸肩部身体冷却が直腸温および持久性運動能力に与える影響
　片岡 裕恵，林 知也
　スポーツ科学講座

看護学部
・泡マッサージによる足浴の洗浄効果及びリラクセーション効果の検証
　岡田 朱民，假谷 ゆかり，那須 さとみ，仲口 路子，小山 敦代，糀谷 康子，中山 登稔，都築 英明
　基礎看護学講座

・リカレント学習講座を通じての地域貢献
—看護師のキャリアラダーと看護連携型ユニフィケーションからの分析—
仲口 路子，寺谷 愉利子，田中 小百合，三浦 康代，假谷 ゆかり，大城 知恵，西川 秋子，村上 久恵，那須 さとみ，川村 晃右
基礎看護学講座

・看護系大学生の健康とライフスタイルに関する研究
藤田 智恵子
成人・老年看護学講座

・独居女性高齢者のミニデイサービス参加による気分の変化
西川 秋子，小石 真子
成人・老年看護学講座

・新人看護師へのメンタリング機能を用いた職業継続支援
西川 秋子，上仲 久
成人・老年看護学講座

・若年女性のライフスケジュール立案に関する認識と婚前教育の検討
—結婚・妊娠・出産・育児の時期に焦点を当てて—
矢野 惠子[1)]，中村 智美[2)]
[1)] 母性・小児看護学講座，[2)] 名古屋市立大学大学院看護学研究科

・地域住民の睡眠障害とメタボリックシンドロームの関連
佐藤 裕見子
地域保健看護学講座

・地域住民の睡眠障害と生活習慣病因子及び生活環境因子との関連：農山村地域と振興住宅地域の比較検討
佐藤 裕見子[1)]，安田 斉[2)]
[1)] 地域保健看護学講座，[2)] 滋賀医科大学大学院公衆衛生看護学講座

・Body Mass Index（BMI）と睡眠時間と食事の関係性に関する検討
高田 美子[1)]，穂迫 享子[2)]，坂口 京子[2)]，田中 響[3)]，赤井 由紀子[4)]
[1)] 地域保健看護学講座，[2)] 元園田学園女子大学，[3)] 鳥取短大，[4)] 摂南大学

・釜ヶ崎における高齢者特別清掃事業就労者及びシェルター利用者を対象とした結核に関する聞き取り調査の報告
三浦 康代[1)]，井戸 武實[2)]，田中 義則[3)]，上田 裕子[4)]，山本 繁[2)]，高鳥毛 敏雄[2) 5)]
[1)] 地域保健看護学講座，[2)] HEALTH SUPPORT OSAKA，[3)] NPO 釜ヶ崎支援機構，
[4)] 大阪府枚方保健所，[5)] 関西大学

・認知症予防啓発劇の効果の分析
三浦 康代[1)]，福田 章[2)]
[1)] 地域保健看護学講座，[2)] NPO 法人認知症予防サポートネット

・新入生を対象とした禁煙指導の効果について—4 年間禁煙継続指導の 3 年目の報告—
小石 真子，矢野 惠子，藤田 智恵子，大城 知恵，糀谷 康子
地域保健看護学講座

・リカレント学習講座参加者の目標達成度に関連する要因
—2014 年度　本学看護学部リカレント学習講座アンケート調査結果より—
村上 久恵，三浦 康代，寺谷 愉利子，田中 小百合，仲口 路子，西川 秋子，大城 知恵，那須 さとみ，假谷 ゆかり，川村 晃右
地域保健看護学講座

心拍動による肝臓の拡散強調画像の信号変化の観察

梅田 雅宏[1)]，村瀬 智一[2)]

医療情報学ユニット　医療情報学[1)]，脳神経外科[2)]

【背景と目的】肝臓の拡散強調画像（diffusion weighted MRI: DWI）を計測すると肝左葉の信号が低下することがある．この信号低下と心拍動との関連を調べるために，心拍動の大きさと肝左葉の DWI の信号変化について調べた．【対象と方法】健常被験者 5 人を対象として，GE 社製 MRI 装置 Signa LX 1.5T と Body コイルおよび，シーメンス社製 Trio A Tim system 3T MRI と 1 ボディフレックスコイルを利用し，被験者の肝臓の冠状断面をエコープラナー画像法（EPI）を用い DWI を息止め下で心拍に同期して計測した．Signa LX では diffusion TE 50ms，スライス厚 10mm，360mm FOV，4 回積算，b 値を 0-43s/mm2 とした．Trio A Time system では b 値を 0-300s/mm2 とした．【結果と考察】肝左葉の DWI 信号変化は拡張期に低下することが分かった．今後，心拍動に伴う肝左葉の ADC 変化は，肝左葉の粘弾性を調べる指標としての利用が期待される．

仮想灸刺激に伴う脳活動変化の検討

村瀬 智一

脳神経外科学ユニット

【背景・目的】灸による熱刺激は臨床で専門家が行う熱痛刺激から家庭で手軽に行える温熱刺激まで様々である．熱痛刺激は fMRI 実験で盛んに行われているが，痛みを伴わない温熱刺激や温度変化の無い熱刺激に伴う脳活動の検証は行われていない．そこで，鍼灸臨床で用いる温筒灸を仮想した温度変化の緩やかな熱刺激と一定温度を維持した熱刺激に伴う脳活動の変化を検討した．

【対象・方法】実験は健常ボランティア 20 名を熱刺激群（n ＝ 10）と安静群（n ＝ 10）に分けて行った．熱刺激群には自作温熱刺激装置を用いて，33°C 一定，40°C 一定，仮想灸刺激（33°C ～ 42°C までの範囲を緩やかに経時変化する）の 3 種類の熱刺激を行い，それぞれ開眼状態で 6 分間測定した．安静群は熱刺激を行わず，開眼状態で 6 分間測定した．測定装置は SIEMENS 社製 3.0T 臨床用 MRI 装置と 32ch ヘッドコイルを使用した．データ解析は SPM8 で前空間処理を行った後，FSL アドインの MELODIC を用いて，独立成分分析を行い，脳内ネットワークの 1 つである default mode network（DMN）を抽出した．また，熱刺激による DMN の変化を検証するため FSL program の dual regression 解析を用いて，安静群の DMN を基準として検証した．

【結果・考察】独立成分分析の結果，各群で DMN が観察された．また，dual regression 解析の結果，DMN 関連領域の楔前部において，安静群に比べ「33°C 一定」と「灸仮想刺激」で有意な結合性の増加が観察された．今回の結果より，温熱刺激による DMN の変化は皮膚温よりも高い温熱刺激（40°C）では観察されないことから，皮膚温と同程度の微細な熱刺激（33°C 一定）によって生じると示唆された．

The Bulletin of Meiji University of Integrative Medicine

腰痛に対する鍼治療と局所注射の比較
―ランダム化比較試験―

井上 基浩，中島 美和

臨床鍼灸学講座

【目的】腰痛に対して，疼痛発現局所への鍼治療（以下：鍼），あるいは局所麻酔薬の注射（以下：局注）を一定期間行い，その効果を比較検討した．
【方法】腰痛患者 23 名を，ランダムに 2 群（鍼：11 名，局注：12 名）に割り付けた．施術部位は患者の自覚的最大痛み部位 2 ～ 5 カ所とし，各群，4 回（1 回／週）行った「鍼：雀啄（1Hz），各所 20 秒，局注：注射針刺入後に薬液の注入（局所麻酔剤とノイロトロピンの混合液）」．評価には，初回施術前・後，毎回の施術前，施術終了 2・4 週経過後に visual analogue scale（VAS）用いた．また，QOL 評価として適時 Roland-Morris Disability Questionnaire（RDQ），Pain Disability Assessment Scale（PDAS）を使用した．
【結果】VAS において，初回直後は両群ともに有意な症状の軽減を示した．しかし，経時的変化パターンに交互作用を認め，各評価時の群間比較において鍼群に有意な改善を認めた．また，RDQ，PDAS においても，鍼群で有意な改善を示した．
【考察・結語】直後効果は鍼，局注ともに認めるが，継続的な治療による累積効果や，その効果の持続期間は鍼の方が期待できることが明確となった．

腕神経叢への電気刺激が正中神経血流に与える影響

中島 美和，井上 基浩

臨床鍼灸学講座

【目的】麻酔下ラットの腕神経叢への遠心性電気刺激による正中神経の血流変化についてレーザードップラー法を用いて観察した．【方法】Wistar 系ラット（雄性，12 週齢，n ＝ 10）を用い，片側の腕神経叢を鎖骨上部にて露出し，切断後，遠位切断端から遠心性に電気刺激（刺激頻度：10Hz，刺激強度：10V，刺激時間：60sec）を与え，レーザードップラー血流計にて刺激側の前腕部において剖出した正中神経の血流を測定した．
【結果】実測値に関しては，10 肢中 8 肢において，電気刺激中に正中神経血流の増加反応を認め，10 肢中 9 肢においては，刺激中を含む刺激開始から 10 分経過時までに増加反応を示した．初期値と各時点の変化率との比較では，電気刺激終了 2 ～ 7 分経過時において有意な増加を認めた（$p < 0.05$）．【考察】刺激による反応には個体差があるものの，何れも増加反応を示したことから，腕神経叢へのアプローチは上肢症状に対して安定した効果を示す有益な鍼治療方法となる可能性が考えられた．その効果発現機序の 1 つとして，腕神経叢への刺激がその分枝である正中神経幹の束内・束外血管に対して作用し，組織循環動態に影響することにより，症状の改善に寄与するものと考えた．

変形性膝関節症による膝可動域制限を呈する症例に対する鍼治療の効果

山口 成広，井上 基浩，中島 美和

臨床鍼灸学講座

【目的】変形性膝関節症（膝 OA）による膝関節可動域（ROM）制限を呈した 1 症例に対して鍼治療を行い，ROM の改善を認めたので報告する．【症例】66 歳，女性．主訴：左膝関節屈曲制限．現病歴：X-3 年頃より左膝痛を自覚．X 年 3 月，左膝関節屈曲制限を自覚．整形外科を受診，膝 OA と診断され，膝関節鏡視下デブリドマンを施行するも ROM の改善を認めないことから，鍼治療を開始．現症：膝関節屈曲 ROM：右 130°，左 90°．安静時痛（－）．左膝関節屈曲時に大腿前面部に疼痛（＋）．左大腿四頭筋の過緊張（＋）．術中所見：癒着，関節内異物（－）．鍼治療：過緊張筋に対して，1 ～ 4 診は単刺術を，5 ～ 20 診は運動鍼を行った（5 日／週，計 20 回）．評価：毎回の治療前後に左膝関節 ROM（他動）を計測した．【経過】2 診目を除く毎回の治療直後において，ROM の改善を認めた．5 ～ 20 診においては 1 ～ 4 診よりも高い直後効果が見られた．【考察・結語】本症例は膝 OA に起因した筋性拘縮による ROM 制限であり，このような症例に対する過緊張筋への鍼治療は有益であり，運動鍼は単刺術と比較して高い効果をもたらす可能性があると考えた．

トリガーポイント検索方法に関する検証
―効果的な鍼治療を行うために―

小田切 耕平，井上 基浩，中島 美和

臨床鍼灸学講座

【目的】トリガーポイント発現筋の有用な検索方法を明確にすることを目的として，当該筋への負荷のかけ方の相違による疼痛の誘発状況について検証した．【方法】慢性的な肩凝りを有する被験者 16 名を対象とした．症状のある頸肩部上でトリガーポイント発現筋を同定した後，全ての被験者に当該筋を 1．伸展，2．自動的に収縮（自動収縮），3．抵抗を加えて自動的に収縮（抵抗収縮），4．短縮させ，同定した部位に誘発される疼痛の程度を Visual Analogue Scale（VAS）を用いて記録した．【結果】当該筋を伸展した際において他の負荷方法と比較して有意に高い値を示した（vs. 自動収縮：$p < 0.001$，vs. 抵抗収縮：$p < 0.01$，vs. 短縮：$p < 0.0001$）．抵抗収縮は短縮との比較では有意差を認めたが（$p < 0.05$），自動収縮との間には有意差を認めず（$p = 0.44$），自動収縮と短縮の間においても有意差を認めなかった（$p = 0.11$）．【考察】本研究の結果から，トリガーポイント発現筋を決定する際は当該筋を伸展させて検索する方が，より的確に同定できる可能性が示唆された．

The Bulletin of Meiji University of Integrative Medicine

月経随伴症状に対する仙骨部への円皮鍼の貼付による効果

金 令子，中島 美和，井上 基浩

臨床鍼灸学講座

【目的】月経時に下腹部痛，および腰下肢症状を訴える被験者を対象として，月経前一定期間に亘り，仙骨部への円皮鍼の貼付を行い，施術効果を検証した．【方法】器質的な原因がなく，月経時に下腹部痛，および腰下肢症状を自覚する女性 3 例を対象とした（下腹部痛 n ＝ 3，腰痛 n ＝ 3，下肢痛 n ＝ 1）．研究参加同意後，初回月経終了日の翌日より，仙骨部（次髎穴，左右 2 ヵ所）への円皮鍼貼付を開始し，次回の月経開始時まで貼付し続けた．初回（円皮鍼貼付前）および次回月経時（円皮鍼貼付後）の症状の程度について，それぞれ Visual Analogue Scale（VAS，mm）を用いて記録した．【結果】下腹部痛は 66.3 ± 14.0 → 14.0 ± 24.2（円皮鍼貼付前→円皮鍼貼付後），腰痛 51.7 ± 11.5 → 7.0 ± 12.1 となり，下肢痛は 30 → 0 と変化した．【考察】全ての被験者において円皮鍼貼付後に下腹部痛および腰下肢症状の改善が見られたことから，月経前の一定期間における仙骨部への円皮鍼貼付は，月経随伴症状である下腹部痛および腰下肢症状の発症を予防できる有益な方法である可能性が考えられた．

アトピー性皮膚炎に対する鍼灸治療

江川 雅人[1)]，福田 晋平[1)]，苗村 健慈[2)]

[1)] 保健・老年鍼灸学講座，[2)] 内科学教室

アトピー性皮膚炎に対する鍼灸治療の臨床的効果，および I 型アレルギーに関与する血中の好酸球数，IgE RIST 値の変化とリンパ球の Th1 ／ Th2 比の変化について検討した．対象はアトピー性皮膚炎と診断された 45 名（平均年齢 20.8 ± 2.1 歳，罹病期間 14.4 ± 5.8 年，28 例でステロイド剤の使用）．鍼灸治療は①中医学的分類：風熱証，風湿証，風寒証，気血両虚証に分類した治療，②気血陰陽・臓腑弁証による弁証論治，③随伴症状に対する対症療法的施術を行った．使用鍼は 40mm 16 ～ 18 号ステンレス製鍼とし，灸療法には温筒灸 1 ～ 2 壮あるいは透熱灸 5 ～ 10 壮を行った．治療頻度は 1 回／週程度とした．平均 7.6 ± 9.9 ヶ月間に 24.0 ± 23.3 回の鍼灸治療を行い，掻痒感の「軽度改善」以上が 80.0％，皮疹の「改善」以上が 78.8％に認められた．鍼灸治療により掻痒感が「著明に改善」「改善」した症例においては血中の好球数や IgE RIST 値が低下した症例の割合が多く，アレルギー性炎症の改善がうかがわれた．また，IgE RIST 値の低下が認められた症例ではリンパ球 Th1 ／ Th2 比が上昇した症例の割合が高く，IgE 抗体産生を促す Th2 リンパ球機能の相対的な抑制傾向が示され，鍼灸治療によるアトピー体質改善の可能性が考えられた．

鍼治療によって生じる視力向上効果

鶴 浩幸，皇甫 泰明，福田 晋平，江川 雅人，片山 憲史

保健・老年鍼灸学講座

「鍼治療を受けると物が見えやすくなる.」とのコメントが患者さんから得られることが多い．このような患者さんの治療後の感想から，鍼治療により一時的に視力が向上することが予想される．そこで，鍼刺激が視力に与える影響について検討した．屈折異常（近視・遠視・乱視など）以外に眼の疾患をもたない被験者（平均年齢 23 歳，36 名 72 眼）を対象とし，鍼刺激の前後で「裸眼視力（眼鏡やコンタクトレンズを使用しない時の視力）」や「普段，患者さんが使用している眼鏡で矯正した視力」，「完全矯正した視力」などを測定した．その結果，経穴とよばれるツボに鍼刺激を行うと「裸眼視力」や「患者さんが普段使用している眼鏡で矯正した視力」，「完全矯正した視力」などが有意に向上することが分かった．また，合谷穴，攢竹穴，太陽穴などの眼と関係が深いとされる経穴（ツボ）に鍼刺激を行った方が，上記の経穴から位置をずらした部位を鍼刺激するよりもはっきりとした効果がみられた．これらのことから，経穴（ツボ）への鍼治療が視力などの眼の機能改善に有用な治療法であることが示唆された.

駆血圧の違いがヒト安静時における体表の硬さに及ぼす影響

木村 啓作，渡辺 康晴，梅田 雅宏，城田 健吾，吉田 行宏，片山 憲史

鍼灸学部　保健・老年鍼灸学講座

【目的】鍼灸臨床において，体表から得られる硬さは，診断情報であると同時に治療の指標としても扱われている．そこで，硬さのメカニズムの一端を解明するために，1）駆血負荷と動静脈血流および前腕断面積との関係，2）駆血負荷と硬さとの関係，3）混合駆血負荷と硬さとの関係を検討した.
【対象・方法】1）と 2）では 7 名，3）では 6 名の健常成人ボランティアを対象とした．駆血負荷は 120 と 230mmHg を選択し，上腕部の駆血によって駆血下遠位の前腕部を測定した．動静脈血流と前腕断面積の評価には 1.5T 臨床用 MRI 装置を，硬さには動的触診システムを用いた.
【結果】動脈血流は 120 と 230mmHg の両群で減少したが，その減少は 230mmHg の駆血圧で顕著であった．静脈血流は両群で減少した．前腕の総断面積は 230 よりも 120mmHg の駆血圧で有意に増加し，筋断面積の変化と近似していた．硬さは，230 よりも 120mmHg の駆血圧で有意に増加した.
【考察・結語】230mmHg の動静脈遮断圧よりも 120mmHg の静脈遮断圧で動脈血流の流入，総断面積（筋断面積）と硬さの有意な増加が認められたことから，体表から得られる硬さは筋膜内の容量増加に伴う筋内圧の関与が考えられた.

The Bulletin of Meiji University of Integrative Medicine

運動負荷時のエネルギー代謝に及ぼす鍼通電刺激の影響

吉田 行宏

保健・老年鍼灸学講座

【目的】エネルギー代謝に及ぼす鍼通電刺激（EA）の影響を検討するため，血中乳酸（BL）と血中遊離脂肪酸（FFA），呼吸代謝等のパラメーターを測定し検討した．
【方法】健常成人男性 7 名（23 ± 1 歳）を対象とした．cont 群（無刺激）と EA 群を設け，同一被験者に対して 2 回の実験を行った．自転車エルゴメーターを用いてランプ負荷をオールアウトまで行った．負荷前に両側の内側・外側広筋，大腿直筋に対して 40mm 20 号鍼を刺入し，低周波鍼通電器で 10 分間，2Hz で筋収縮が起こる強度で EA を行った．被験者の指先から自己採血により BL と FFA を測定し，BL の結果から LT（乳酸性作業閾値）を求めた．負荷時の呼吸代謝から V-Slope 法を用いて VT（換気性作業閾値）を算出した．下肢の疲労感は VAS にて測定した．10 分間の EA（安静）の後に FFA と下肢の疲労感の測定を行った．その後，運動負荷を行い 30 秒ごとに BL を測定し負荷直後に FFA と下肢の疲労感を測定した．
【結果及び考察】EA 群では VT と LT 共に延長が認められた．BL の最高値, FFA は両群で差は認められなかった．下肢の疲労感は負荷後で有意に上昇したが，両群間では有意な差は認めなかった．VT 及び LT は持久力の指標とされていることから，運動前の EA はエネルギー代謝に影響を及ぼし持久力を向上させる可能性が示唆された．

高齢者疾患に対する鍼灸治療：パーキンソン病に対する鍼灸治療

福田 晋平，江川 雅人

保健・老年鍼灸学講座

パーキンソン病は，振戦，筋強剛，寡動を示す中枢神経系の疾患で，50 歳以上の高齢者に多い疾患である．L-dopa という薬剤により，症状は改善するが，次第に効果が減弱し，副作用症状が出現することがある．高齢社会の到来により患者数も増加し，鍼灸治療を希望して来院する患者も年々増加している．明治国際医療大学では「パーキンソン病鍼灸治療専門外来」を開設し，現代医学の薬物治療と鍼灸治療の併用による治療を勧めている．我々は 15 名のパーキンソン病患者に対して鍼灸治療を施術し，その結果，自覚的な表情の乏しさ（60.0%）や歩行障害（53.8%），振戦（43.2%）の改善を認めた．また，抑うつや，便秘，睡眠障害などの自律神経症状や痛みにも効果を認めた．これらの効果がパーキンソン病特有の症状を軽減し，投薬量を抑制し，時には投薬量を減量することが可能な症例もみられた．本疾患は慢性進行性疾患であり，症状は持続し，増悪するが，鍼灸治療の併用は副作用もなく，長期間継続することが可能な，極めて安全な治療方法として注目されている．

リカレント学習講座を通じての地域貢献
―看護師のキャリアラダーと看護連携型ユニフィケーションからの分析―

仲口 路子，三浦 康代，寺谷 愉利子，田中 小百合，大城 知恵，
西川 秋子，川村 晃右，那須 さとみ，村上 久恵

看護学部　看護学科

1. 研究目的

リカレント学習講座は看護学部の地域貢献活動の一環として学部開設当初より開講してきた．受講対象は病院等に勤務する看護師で，臨床における看護研究をサポートするプログラムを展開してきている．毎年度の参加者は少しずつ増加してきている．そこで本研究では，まず臨床で活躍する看護師にとっての臨床看護研究の意味を再考し，次いで「看護連携型ユニフィケーション」の観点から本講座の役割を問い直すことで，今後のリカレント講座の展開に検討を加える．

2. 方法

2014 年度開催のリカレント学習講座で行った参加者対象のアンケート（21 人）と文献による検討．

3. 結果および考察

アンケートの結果から，参加者の受講動機として看護研究への不安が多く挙げられていた．これは，看護師のキャリアラダーの構成要素（達成目標）として「臨床看護研究を遂行する能力」がますます重要視されてきていることが大きく影響していると考えられる．したがって今後のリカレント学習講座の展開も大変重要である．またこのような関わりは「臨床と大学の協働」として，看護連携型ユニフィケーションの観点からも，さらに相互の関係性を深めることができるようなプログラムの開発が必要である．

看護系大学生の健康とライフスタイルに関する研究

藤田 智恵子

看護学部　成人・老年看護学講座

【目的】看護系大学生に対する調査から日常保健行動に影響を与える要因について検討し，大学教育における健康教育の在り方を検討する基礎資料を作成すること．

【方法】N 市の看護系大学学部生 30 名を対象に 2014 年 2 ～ 4 月に調査実施．調査前に所属大学研究倫理委員会の承認を得，対象者には十分な説明を行い文書で同意を得た．

【結果】対象の平均年齢は 20.5 歳．主観的睡眠良好・不良 2 群間の保健行動得点比較では，睡眠不良群の得点が有意に低かった（$p < 0.05$）．カフェイン飲料良く飲む，飲まない 2 群間比較では，カフェインを良く飲む群の得点が有意に低かった（$p < 0.05$）．特性不安得点は 49.8，状態不安得点は 41.4 であった．

【結論】睡眠不良群では保健行動得点が低かったが，平均睡眠時間は睡眠良好群が 6.4 時間，不良群が 5.4 時間であり有意差は認められなかったことから，熟睡感が得られる環境調整の必要があると考えられた．清水らの大学生を対象に行った研究（特性不安得点 45.4，状態不安得点平常時 42.0）と比較すると，調査対象者群の特性不安が高かったことから，特性不安の高い対象者に合わせたストレスマネジメント教育の必要性が示唆された．

The Bulletin of Meiji University of Integrative Medicine

Body Mass Index（BMI）と睡眠時間と食事の関係性に関する検討

高田 美子[1)]，河原 照子[1)]，穂迫 享子[2)]，坂口 京子[2)]，田中 響[3)]，赤井 由紀子[4)]

[1)] 明治国際医療大学　看護学部　地域保健領域，[2)] 元園田学園女子大学，[3)] 鳥取短期大学，[4)] 摂南大学

今回の結果から睡眠と食事とBMIの傾向では，食べてからすぐに寝ると答えた人に，BMIが高い傾向にあった．さらに睡眠時間も短い傾向であることがわかった．BMIが増えるにしたがって睡眠時間は短い傾向を示していた，食後30分以内に就寝する人が肥満になるのか，睡眠時間が短い人が肥満傾向になるのか，肥満傾向にある人は何らかの原因で睡眠時間が短いのかは言及できないが，BMI 30以上群は19-22群に比べ有意に睡眠時間が短かった，BMI 18以下群の人に比べ25-29群と30以上群は有意に食事の無茶食いをすると答えており，BMI 19-22群に比べ23-24群は有意に生活調査表を概観するとBMI 30以上の人は食事の時間や就寝時間等にばらつきがみられ，生活リズムが不規則になっている人が多く見受けられた．これらのことから食行動のあり方が睡眠とBMIに関連していることが示唆された．今回の研究の対象は看護職も含めた夜勤のない成人を対象としているが，現状では生活環境の変化そして夜型生活者はますます増えている現状を踏まえ対象を理解したより詳細な分析を行う必要がある．今後もBMIと睡眠と食事の関連性について研究を深めたい．

新入生を対象とした禁煙指導の効果について
—4年間禁煙継続指導の3年目の報告—

小石 真子，矢野 惠子，藤田 智恵子，大城 知恵，糀谷 康子

看護学部

看護学部3年生のたばこに対する認識を把握し，1年次・2年次との比較を行い，卒業時までの継続した禁煙指導のあり方を検討した．2014年7月17日，「家族関係援助論における“家族を含む禁煙指導”」の授業終了後に自記式アンケートを実施した．調査内容：性別，喫煙の有無と一日喫煙本数，禁煙希望および禁煙に関する治療の希望，禁煙教育の効果，構内禁煙や医療従事者の禁煙の必要性，加納式社会的ニコチン依存度質問表（Kano Test for Social Nicotine Dependence，以下KTSNDとする）．

結果：回収数54（回収率94.7%），男性13人，女性38人，不明3人であった．

喫煙者は男性3人，女性1人であった．「禁煙教育の効果」に対する学生の意識は，2年次は低くなったが，3年次は「禁煙教育」を行ったため，高くなっていた．「大学構内の禁煙」や「医療従事者の禁煙」に対する意識は年次ごとの推移では，低くなっていなかった．KTSND平均値は1年次の「禁煙」講義後に比べ，2年次・3年次は喫煙容認度が上がっていたが，2年次と3年次を比べると変わりなかった．

結論：定期的な禁煙教育の実施により学生が「禁煙教育の効果」を実感できること，将来の医療従事者として意識や健康つくりのための環境を考えられることが示唆された．

リカレント学習講座参加者の目標達成度に関連する要因
―2014 年度　本学看護学部リカレント学習講座アンケート調査結果より―

村上 久恵，三浦 康代，寺谷 愉利子，田中 小百合，仲口 路子，
西川 秋子，大城 知恵，那須 さとみ，川村 晃右

看護学部　看護学科

目的:PBL 学習法を取り入れたリカレント学習講座における受講者の目標達成度に関連する要因を検討する．
方法：リカレント学習講座受講終了後に，アンケートにて，目標達成度合（%），プログラムの各内容（研究動機・キーワード検索，文献検討，統計の基本と使い方，文献レビューとクリティーク，研究計画書の書き方，研究計画書発表）の適切さを「1．適切ではない～ 5．十分適切である」の 5 件法による回答および自由記載欄への記入を求めた．そして，目標達成度とプログラム各内容との相関係数を求めた．
結果および考察：受講者男性 2 名・女性 19 名の計 21 名の内，回答の得られた 19 名を分析の対象とした．目標達成度は，40 ～ 100%で，平均 74.74 ± 13.07%であった．目標達成度と講座の各内容との関連では，「統計の基本と使い方」における内容の適切さが，目標達成感に最も反映され，相関があった．これは，講義が初級者にもわかりやすい内容で理解が深まった一方で，苦手と感じている受講者もみられたことが影響したと考えられる．今後，統計の演習も含めた講座の内容などを検討する必要があることが示唆された．

The Bulletin of Meiji University of Integrative Medicine